

Title	真淵の歌学に関する覚え書
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1958, 21, p. 35-41
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68528">https://hdl.handle.net/11094/68528</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 真淵の歌学に関する覚え書

宇佐美喜三八

### 一 稻彦本『古今集左注論』について

『古今集左注論』は久しい間荷田在満の著作の一つに数へられてゐるが、昭和に入ってから、在満の著作ではなく、真淵の著作であらうといふ意見が現はれて来た。わたくしはその驥尾に附して、それが真淵の著作であるべきことを決定的に明らかにするために、本誌第一輯において論考を試みる所があった。(その小論は少し補訂を加へ、拙著『和歌史に関する研究』に収録した。)そこでかなり詳しく論証したやうに、『左注論』が真淵の著書であることは、もはや疑ふ余地のない事実であると考へる。ところが上記の小論を發表してから後、その事実を裏書きするやうな『左注論』の写本を手に入れることが出来たので、ここにその書物について述べ、傍ら前稿の一つの駄目押しにもしておかうと思ふのである。

『古今集左注論』は荷田全集に翻刻せられるまで写本で伝へられて来て、賀茂真淵の著と記した伝本のあることは、前稿に述べた通り、すでに野村八良博士によって紹介せられてゐる。しかし一方では著者を荷田在満と記した本も伝はつてゐるので、記された著者名のみをもって直ちに著者を決定し難いことは、これも前稿に述べた

通りである。今ここに紹介しようとする『左注論』の写本は、橋本稻彦の自筆手沢本と見なされるもので、稻彦は『左注論』を真淵の著書として校訂を加へ、巻末に識語を附してゐる。のみならず、書林の主人といふ経歴を持つてゐた稻彦は、この賀茂翁の遺稿を板行する意図のあつた痕跡が認められるのである。稻彦本の扉には野の粹で囲んだ中に、

賀茂大人著

古今倭調集左注論

源稻彦校刻

と書かれてをり、この扉はもともと表紙裏に張つた見返しを改装したものでらしく、扉の裏折は新しい紙を張り足してきてゐる。稻彦が賀茂大人の『左注論』を校訂して、これを板に彫らうと計画したことは、右の扉における記載によって推測せられるであらう。本文はそのまま板下にも使用してもよいほどの端正な文字で清書せられてゐて、内題には、

寛保二年九月、金吾君に奉る。

の、作者の論、并古今集左注論

賀茂真淵

とある。荷田全集本や野村博士蔵本のやうに、「古今集左注論」と

いふ内題は記されてゐない。さうして巻末には本文に続いて次のやうな稲彦の識語がついてゐる。番号を附して括弧で囲んだ部分は紙を張り重ねて訂正した文句である。

元本、誤いと多きを、さまざまに考へて、かくはものしつれど、なほいぶかしき所なきにしもあら(ねど、さておきぬ、すべて加茂の翁の、かゝれたるものは、かにかくに、さとりがたき)所々、おほかるを、又一わたり、よみ考ふれば、こともなく、きこゆることも、多きぞかしなど、師の翁も、つね(にい)はれ侍りし、(さ)て(此書の)中に、万葉のうたを引れたる、(元本に、訓点)をつけず、(今よむ所は、つづけたる所なれ)ば、かの翁の意には、たがふ所もあらんを、みむ人なあやしみそ、ついで(にい)ふ、此書の言葉ども)に、てにをはのととのひなど、いかにぞやおほゆることも多かれど、さる事は、この翁の書には、(すべて、なきにもあらねば、まさしく写誤)にあらぬは、あらたむることなし、稲彦いふ、)

この文は本文と同様の筆跡で書かれてゐる。紙を張って訂正を施すといふやうな推敲の跡から考へて、識語は当然稲彦の自筆であることが推定せられ、従つて識語と同筆跡の本文も稲彦の自筆であらうと思はれる。いづれにせよ、稲彦が『古今集左注論』の校刊を企画したことは明らかで、右の識語もその目的に応じて書かれたものに相違ない。

稲彦が張紙をして訂正を加へた箇所の初案の文は、紙を透かして辛うじて判読することができる。それを示すと次の通りである。

1 (ねど、さておきぬ、………さとりがたき) はず、さる善本を得て、またくも校合してむ、かくいふは文化三年の霜月

のなかば、

2 (にい)はれ侍りし、(さ) 〓にうめかれ侍りし、(さ)

3 (此書の) 〓右の中

4 (元本に、訓点) 〓元本に点を

5 (今よむ所は………所なれ) 〓されど今は私によみをつけ、

6 (にい)ふ、此書の言葉ども) 〓ついでにいふ、此書の言葉、つ

かひども

7 (すべて、なきにもあらねば………稲彦いふ) 〓すべてなき

にもあらねば、正しく写誤にあらじとおほゆるは、あらたむることなし、

これを見ると識語は初案の文では1の箇所まで終つてゐたのであるが、それを訂正して書き加へて成つたものであり、その後の部分は文を書きながら訂正を施し、清書本の体裁を整へるために、紙を張り重ねて書き改めたのであらうと思はれる。しかしそれはともかくとして、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。即ちそれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあつて、稲彦が『左注論』の清書を終り、識語を書いたのは文化三年の十一月の半ばであつたといふ事実を知ることができる。稲彦はそれから約三年後の文化六年の六月に二十九歳で没した。

稲彦は本文に朱で校合を加へてゐる。その箇所は多くはないが、本文の書写の誤りはやはり紙を張つて訂正してゐるから、朱書はそれと区別すべきであると考へる。他にそれらとは別に、頭書として稲彦の意見を書き入れた所があり、その中には、真淵の間違ひを正したのも見られる。例へば『左注論』の其の三十四には「拾遺集に、貫之のうた」として、「おほつかないまとしなればおほあらし

のもりの下草人もありけり」といふ歌が引かれてゐるが、その所には、

稲彦按に、此哥、拾遺にみえず、おほあらしの、もりの下草、しげりあひて、ふかくも夏の、なりにけるかな、此うたを、おぼえたがへられしにや、是は拾遺集、夏部に有り、ただみねのうたなり。おぼつかなの哥は、貫之集にみえたり、撰集の出所未考す、

と頭書が加へられてゐる。

『左注論』の中には何首かの万葉集の歌が原文のままに引かれてゐて、稲彦がそれに訓読を附してゐることは、前引の識語に述べてゐる通りである。「今よむ所は、予つけたる所なれば」といってをり、稲彦はある特定の学者や書物の訓点をそのまま用ひたのではなく、先人の訓点に基づいて私案を立てたものと解せられる。例へば万葉の巻十一にある

桜麻乃 苧原之下草 露有者 令明而射去 母者雖知(二六八七)

に、稲彦は「さくらあさの をふのしたくさ つゆしあらば あかしていゆけ はははしるとも」と訓を附してゐる。寛永板本では第三句を「つゆしあれば」と訓んでをり、寛永本のごとく訓むのが現代でも定訓となつてゐるやうである。類聚古集・嘉曆伝承本・細井本および袖中抄第十一や和歌重蒙抄第七の所引の歌などでは、第四句以下の訓に相違はあるが、第三句が「つゆしあらば」になつてゐる。然し稲彦がそれらを参照したか否かは疑問である。稲彦の師であつた本居宣長は『古事記伝』巻三十九の允恭記の歌の注に右の万葉の歌を引き、第一句には「さくらをの」、第三句には「つゆしあ

れば」と訓を附してゐる。古事記下巻の伝は文化三年には成立してゐたにしても、刊行せられたのはそれよりも後で、稲彦が右の宣長の訓を見てゐたとは断言することができない。この歌のみではなく『左注論』の中の万葉歌に稲彦の附した訓には、總体的にいって、特に宣長説の影響といふべきものは認められないやうに思はれる。

なほ真淵は『万葉考』巻四で右の歌の第一句を「さくらをの」、第三句を「つゆしあれば」と訓んでゐる。真淵の引用した歌に訓をつけたことについて、「かの翁の意には、たがふ所もあらむを、みむ人なあやしみそ」といつてゐるやうに、稲彦は真淵の訓のことは必ずしも顧慮してゐないのである。もっとも文化三年には、『万葉考』も未だ巻一・二・別記の三巻だけしか刊行せられてはをらず、真淵の訓を全面に知ることには困難であつたに相違ない。要するに稲彦は著者の真淵や師の宣長の訓には拘泥しない立場において、私見をもつて訓をつけたものと解すべきであらう。

以上のやうに鈴門の俊英は『古今集左注論』に校注を加へ、これを刊行して、真淵の業績の一斑を世に弘めようと企図したのであつた。稲彦は『古今集左注論』が真淵の著作であることを自明のこととして、学者的な見地から、いささかこれに整備を加へたのである。在満の著作としても伝はつてゐるといふ事実には、まったく気づいてゐないやうに思はれる。上野図書館蔵の『左注論』の写本は、荷田全集に翻印せられてゐるが、著者が荷田在満となつてゐて、奥書に「文化十三年葉月十五日写」、「癸亥春得是書尋以一本校焉」とあり、速水行道といふ名が記されてゐる。稲彦本よりは後の書写である。賀茂真淵の著とある野村八良博士蔵本は、天明四年羽根真清の写したものを、寛政十二年宇宙保光の写した本で、これは稲彦

本より少し前の書写といふことになる。『古今集左注論』を在満の作とする説がいつの頃から生じて来てゐるかは明らかではないが、稲彦はこれは真淵の著作として毫も疑つてゐないのである。もしも稲彦本が刊行せられてゐたならば、『近代名家著述目録』以下の諸書において、『左注論』を在満の著作とするとはなく、また荷田全集に『左注論』が収録せられることもなかつたであらうと考へる。

## 二 真淵の歌論と堀川学

真淵の古学が徂徠の古学に倣つたものではないかといふことは、夙に野村公台が『読加茂真淵国意考』の中で言及したところである。近代の学者は両者の關係についてしばしば比較討究を試み、今日においては真淵の學問に古文辞学の影響のあることは、もはや否定できない事実と考へられてゐる。真淵は晩年に古道思想の円熟するに至つて、儒者の思想を極力斥け、徂徠や春台を罵つて憚らなかつたが、若い時代には、徂徠の孫弟子にあたる春台の門人渡辺蒙庵に師事して、古文辞学の洗礼を受けたのであつた。江戸に出てからは服部南郭と親しい交りをつけ、儒学を排斥しても南郭の學問に対して好意を抱いてゐたらしいことは、真淵の著書の中の記述によつて推察することができる。従つて真淵の學問が徂徠学派の古文辞学から影響を受けてゐるのは当然であり、彼の歌学を考察するに際しても、古文辞学との關係はもろろん無視してはならない問題となるであらう。然しそれはそれとして、今ここに取り上げようとするのは、真淵の歌論と仁斎の古義学との交渉の問題であつて、さういへばやや奇異に感ずる人もあるかも知れないが、真淵の歌論を読むと

その中には堀川学派の著書との関連を思はせる論述が見られるのである。

真淵が最初に書いたまゝとまった歌論として今日知られてゐるものは、寛保二年十一月、田安宗武に求められて草した『国歌八論余言拾遺』である。その「歌をもてあそぶ論」の中には、次のやうに論じた一節がある。

又上一人よりはじめていとやんごとなきあたりは、世の中のあるりさまも国々のさまも、つねにしも見聞給ふことなく、まして人の情をよくしろしめすことなし。詩は人情をのぶると莊周といふ人やいひ侍りつらむ。げにもその心のおもふ所を一すぢにのぶるものは詩歌なりけり。やんごとなきわたり、これによりてぞ世の中の事をも人の心をもしろしめすべくは、いとめでたきわざなり。

詩は人情を表出したものであるから、為政者は民間の詩を見れば下情に通じ、政治の参考にすることができるといふのは、古來儒家の説いてゐる所である。真淵のこの儒学的見解は彼が若くして身につけた徂徠学の教養から出たものに違ひない。徂徠は『答問書』中巻で詩について、「言葉を巧みにして人情をよくのべ候故、其力にて自然と心こなれ、道理もねれ、又道理の上ばかりにては見えがたき世の風儀国の風儀も心に移り、わが心をのづからに人情に行わたり、高き位より賤き人の事をもしり、……」と効用を述べ、『弁道』にも同様の説を立ててゐる。真淵の思想はこの系統を引いたものであらうが、もっと具体的には、彼が直接に学んだ渡辺蒙庵を通じて、春台の思想から影響を受けたのではないかと思はれる。春台はその著『朱氏詩膏肓』の巻頭文で、

又況人主在九重之内。而欲知閭巷人情。難之難矣。今夫詩者。人情之形于言者也。三百篇其尺之矣。天下人情。于何不有。君子誦詩。不出戶庭。可以知天下人情。

と述べてをり、右の真淵の文は、これと趣を同じうする。(春台は『六経略説』においても同様のことを述べてゐる)。「朱氏詩伝膏育」は後序に「享保十五年八月辛丑」と見え、諸門弟らの蔵する所であったが、延享三年になって蒙庵がこれに序を附して刊行した。真淵は在郷時代に蒙庵によって右の春台の説に接する機会を得たのではないかと想像せられ、また春台の思想を承けた蒙庵からも感化を被つたことが考へられる。蒙庵もまた『朱氏詩伝膏育』の序文で、「詩也者。人情之形于言者也」といって、その師春台の思想を全面的に尊んでゐる。

かうして、詩は人情を述べたものといふ真淵の思想が、彼の徂徠学系統の漢学の教養に因ることは一応認められるとしても、ここで問題となるのは、前引の『余言拾遺』の中に、

詩は人情をのぶると莊周といふ人やいひ侍りつらむ。とある言葉である。(岩崎文庫本では「人情」の字が「人性」となつてゐるが、前後から見て、やはり他本のやうに「人情」とあるべきであらう)。春台は右の『朱氏詩伝膏育』の巻頭文の中で、「古人立言引詩。伝記所載可見矣」と述べ、詩に関する諸家の説をあげてゐるが、莊子の言については、

莊子曰。詩以道志。

と記してゐる。(『六経略説』においても同様である)。「莊子」には天運篇に六経の名をあげ、天下篇に、

詩以道志。書以道事。礼以道行。樂以道和。易以道陰陽。

#### 春秋以道名分。

と述べて、六経の性質を説明した中に詩の説が見える。(もとより「詩」といふのは『詩経』についていつたものである)。それ以外に詩に關して述べた所は見出されないやうである。鈴木博士の『支那詩論史』(二九頁)にも莊子の詩説としてこの天下篇を引き、「詩は以て志を道ふ」とある他の詳細は知り難いと記されてゐる。真淵のいふ「詩は人情をのぶる」といふ言葉はそのまま「莊子」の中には求められず、真淵は天下篇の「志」の語を「人情」といふ語で表はしたのであるかも知れない。「莊子」の板本(注釈書を含む)数本について調査してみたところ、天下篇の本文が「詩以道人情」となつてゐる本は見当らなかつたのである。

真淵の漢学の師渡辺蒙庵は老莊の研究家でもあつた。後年の真淵の老莊思想に対する同情的態度が蒙庵の影響であるか否かは別問題として、真淵は若い日に蒙庵から『莊子』について学ぶ所があつたかも知れない。六経を重んじた徂徠学の流れを汲む者として、『余言拾遺』を書く時にも、真淵は天下篇の記事を恐らく知つてゐたであらうと思はれる。然し「詩は人情をのぶる」といふのは、直接に天下篇の本文を参照して書いたのではなく、『莊子』以外の書に莊子の言として見える所に拠つたのではないかといふ推測もできるのである。

さてそこで注意せられるのは伊藤藤涯の『古今学変』の中の記述である。同書上巻の詩を論じた条の中には、詩に懲創の説はないと説いた後、

然則詩以道人情。其言雖出莊子。而此一語亦足以括三百篇之大旨。

と述べられてゐる。この場合の莊子は人名ではなく書名であらう。これに従へば「詩以道入情」といふ言葉が「莊子」に見えてゐることになるが、前記の通り、『莊子』には天下篇に「詩以道志」とあるのが一般に認められてゐて、「詩以道入情」といふ言葉は見出し難い。それにしても東涯は「詩以道入情」をやはり『莊子』の天下篇にある言葉として挙げてゐるものと思はれる。そのことは同じく東涯の著述である『読詩要領』の中の次の記事によって推定することができるのである。

莊子に五經の事を説て、詩以道入情とあり。……莊子は異端の事なれども、このことばよく詩の道をとわりたるゆへに、先儒以来常に引用せらる。詩のことばはさまざまなれども道入情といふの一句にてつつまることなり。

すでに記したやうに、『莊子』には天下篇の六經の性質を述べた所に「詩以道志」と見えてゐる。東涯が五經と記してゐるのは、詩・書・礼・樂・易・春秋の六のうち、秦火に滅んだといふ「樂」を省いて後世五經と称してゐるのに従つたものと思はれ、東涯の「詩以道入情」は、天下篇の言葉を指したものと解して差支へがないと考へる。「莊子」には天下篇に「詩以道入情」とある本が伝はつてゐるのであらうか。(中国哲学専門の学者にも尋ねてみたが、恐らくそんな本はないであらうとのことである)。

『古今学変』は享保七年の著で、門人の間に写し伝へられて、寛延三年に刊行せられ、『読詩要領』は板本として刊行せられず、写本で伝はつた。時代的に見れば、真淵がこれらの書に接する機会はあまりあり得たはずで、真淵の「詩は人情をのぶると莊周といふ人やいひ侍りつらむ」は、東涯の著の記述に拠つたのではないかとい

ふ推測も一応は成立つてであらう。真淵が京都に遊学したのは堀川学の隆盛時代であつた。また江戸に出てからは荷田在満と特に親しく交つたが、在満が堀川学を修めたと思はれることは、かつて本誌第十三輯で論述した所である。

もとより真淵が東涯の著書によって莊子の言を引いたと見るのはあくまで一つの推測であつて、真淵の言葉と東涯の言葉とに、はたして関係があるか否かは現在の所決定することできない問題である。東涯は、『莊子』は異端の書であるが、「詩以道入情」の言はよく詩の道の義理を述べてゐるので、「先儒以来常に引用せらる」といつてゐる。従つて真淵は東涯の著書ではなく、先儒の書によって莊子の言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒が『莊子』に「詩以道入情」の言があるとつて常に引用してゐる事実をわたくしはいまだ実証的に明らかにすることができない。その先儒の用例と、天下篇に「詩以道入情」とある本の存在とについては、広く大方の御教示を仰がなければならぬのである。

○

『余言拾遺』の中の言葉が東涯の著述に拠つたか否かは確認し難い所である。真淵の晩年の和歌に関する論述の中には、明らかに仁斎の説に従つたと見なすべきものがある。その問題に關してはかつて「国文学」第十九号(関西大学国文学会)に書いた論考の中でも触れたことがあるが、今それについてやや詳しく述べておくことにしたい。

「明和二年の春加茂真淵六十九の齡にて考侍る」といふ奥書のあつた『古今集序別考』を見ると、仮名序の本文の「そのはじめをおも

へば、云々」のあたりにつけられた頭注の中に、次のやうな記述がある。

古への歌はをさなき心をよむを専らとせり。人まろの歌を挙ていふがごとく、死したる人に猶もあふやとおもひ、なびかぬ山をもなびけといひ、深き池をもあせよといふ如く、思ひにせまる時ふとおもふこと其まよむぞ古へ人の習にて、則をさな児のひとへ心の如くいふに、却てあはれはある也。(中略)から哥も古へはさこそありけ。思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>てふは直也と解て、其事はよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたる也。

感迫つてふと思ふことを率直に詠むのが古人の習はしで、古歌は幼児のごとく一途な心を出したものである旨を述べ、中国古代の詩のことを引合ひに出してゐるが、この「思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>」は、いふまでもなく、論語の為政篇に「子曰。詩三百。一言以蔽<sub>レ</sub>之。曰。思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>」とあるのを意味する。そこで注意せられるのは、「思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>てふは直也と解て」といつてゐることであつて、この真淵の解釈は仁斎の説を用ゐたものに相違ないと思はれるのである。仁斎の『論語古義』には、右の為政篇の語について、

思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>。直也。

と注してゐる。「直也」といふのが仁斎独自の解釈であり、真淵が徂徠の解釈に従つてゐないことは、徂徠の『論語微』における注釈を見て知ることができる。徂徠は、

詩之義多端。不可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>三典要。古之取<sub>レ</sub>義於詩<sub>レ</sub>者。亦唯心所<sub>レ</sub>欲。貳其思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>。是孔子之心也。

と述べ、「思<sub>レ</sub>」や「邪<sub>レ</sub>」の意義などを説いてゐるが、さらに

程子曰。思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>者誠也。仁斎先生曰。直也。可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>不知<sub>レ</sub>三義<sub>レ</sub>矣。

と評して、仁斎の説を排してゐる。即ち真淵は上記の文において徂徠の説は顧みずに、仁斎の説をそのままに用ゐたのであつた。

明和五年、齋藤信幸に宛てた書簡の中で、真淵は「元來荻生惣右衛門なども皇朝の意を知らず、己が好む方にて、不知ことを推ていひしうせにて、純もいへる事ごと毎に誤也」といつて、徂徠派の思想を罵つてゐる。荻生惣右衛門は徂徠、純は大宰春台のことである。晩年においてこのやうに徂徠派を攻撃してゐるのを見て、真淵が「思無<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>」の解釈にあつて徂徠の説を採らなかつたのは当然であらう。同時にその一方、儒者の思想は排しながらも、仁斎の説には心を惹かれる所があつたのではないかと思はれる。

真淵はまた同じ書簡の中で浜松の儒学者流を貶しめ、「論語の中には己が覚え居て間に一人もよく弁せる人なし」と言つてゐる。真淵の論語についての自信のほどは、この言葉からも察することができる。清水浜臣の『泊泊筆話』によれば、在郷時代の真淵の著書に『論語紀聞』なる書があるといふことである。論語を宇宙第一の書として日本的な儒学を打ち立てた仁斎の学問に対して、若い日の真淵が少からず心を寄せたことも想像せられ、真淵と堀川学との接触は案外早い時期から始つてゐたのかも知れない。前述のやうに真淵が東涯の著書から学んだ所があると考へることも、強ちに無稽の推測とはいふことができないであらう。

—大阪大学教授 文学博士—